

## ☹️ 原発の実態

20年間、原発で働いてきた平井憲夫という人がいます。彼が命を懸けて書いた手記によれば、原発の建設現場にはプロの職人が少なくいくら設計が立派でも、設計通りには造られていないのだそうです。作業員から検査官まで総素人によって造られているというのですから驚きです。日本の原発は二重、三重に多重防護されていても、それは設計の段階までで、造る段階でおかしくなっているのだそうです。そして、怖いのが内部被爆です。原発の建屋の中は、全部の物が放射性物質に変わってきます。物がすべて放射性物質になって、放射線を出すようになるのです。どんなに厚い鉄でも放射線が突き抜けるからです。体の外から浴びる外部被曝も怖いですが、一番怖いのは内部被曝です。原発の中ではホコリが放射能をあびて放射性物質となって飛んでいます。この放射能をおびたホコリが口や鼻から入ると、それが内部被曝になります。防護服というと、放射能から体を守る服のように聞こえますが、そうではないのです。放射線の量を計るアラームメーターは防護服の中のチョッキに付けているのだそうです。防護服は放射能を外に持ち出さないための単なる作業着で、作業している人を放射能から守るものではないのです。原発の作業では片付けや掃除で一番内部被曝をしますが、この体の中から放射線を浴びる内部被曝の方が外部被曝より先ずずっと危険なのです。だから、今福島原発で冷却作業をしている方たちは命がけなのです。さて、福島原発の3号機がプルサーマル原子炉で、ウランとプルトニウムの混合物を燃料にしていることは有名な話なのですが、政府も東電もマスコミも数週間の間、プルトニウムのプの字も言わないのは何故でしょう。どう考えてもチェルノブイリ並みか、それ以上の事故なのにレベル4とか5とか言っているのは何故なのでしょう。少なくとも原子力発電所が安全などという馬鹿げた話を信じる人はもう世界中を探しても殆どいないでしょう。原子力発電がクリーンな発電だという話を信じる人もいないでしょう。原爆も原発も終わらせなくては、そういう時代に突入しているのだと思います。

## ☹️ 腐ったみかん

久しぶりに「金八先生」を見て、泣きました。当時の子ども達を思い出したからかも知れません。最初は「2年B組」だった金八。その時、僕も2年1組の担任でした。そう金八と僕はある意味、同じ時代を生きてきたのです。違ったのは、金八はドラマで、僕は現実を生きていたということ。そして当時の五中には「腐ったみかん」の方程式など、これっぽっちも存在しなかった。と、いうことです。ただ、五中にはなかっただけで、その他の学校には実際にあったのです。そして、その腐ったみかんの方程式は金八が嘆くように広がっていきました。実は腐ったみかんを作り出したのは教師の方だったのですが、力のない教師はそれに気づかず、腐ったみかんを自ら作り出し、そして放り出すことにエネルギーを使ってしまったのです。確かに荒れている学校には、今でもそういう方程式があるように僕は感じています。あの時代、僕は金八になどなりたくはありませんでした。金八は金曜の1時間だけの教師だったからです。しかし、現実の学校に生きる僕らは365日子ども達と向きあっていたのです。金八の中で起きることが、現実の学校でも起きていました。だからこそ、本物の学校で生きている僕が、金八ごときに負ける訳にはいかなかったし、負けてなどいなかったのです。金八になどなりたくなかった。というのはそういう意味です。逆に、僕が憧れたのは「北野広大」先生です。小学校の子ども達の心を掴んで話さない水谷豊の北野広大に僕は憧れました。彼には僕にないものがたくさんあったからです。



5中の2年目の僕と2年3組の子ども達です。給食はいつも子ども達の席で食べていました。賢一、祐二、清泰、千春の顔が見えます。2歳の頃です。